

美術の窓(93)

自然の息吹と清新な写実 —朝鮮時代中期の葡萄文大壺—

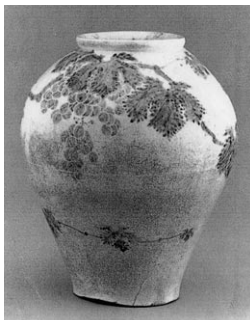
大和文華館館長 水田 徹

李氏朝鮮時代中期、京畿道広州の官窯作と目される本館所蔵の「鉄砂青花葡萄文大壺」(図1)(図2)、その造形の特徴は自然の息吹と清新な写実とでも要約できようか。

まず法量と器形。高さ37センチは大きすぎず軽からず、両腕に赤子を抱くようにすっぽり収まる。肩部の張りも朝鮮時代前期のいかつさが減じて自然な丸味を増し、加えて壺の腰部から上半分と下半分を別々に輻輳成形し口合わせしているために、器形にわずかな撓みが生じ、一体成形による完璧な左右相称性とは異なった柔和な味わいを醸す。口縁の高さと厚みも控え目で、内刳りにした高台と相俟って、人の手になる造形であることを忘れさせるほどに優しく周囲の空間に馴染む。

釉胎の白も心和ませる。宋元や朝鮮時代前期までの白磁の透き通るばかりの灰青白とは違い、所々に淡くピンクと青色を滲ませつつ全体に黄味をたたえる乳白色は暖かく親しみ深く(韓国ではこれを「雪白磁」と呼ぶ)、器形のまろやかさに心地よくマッチする。

(図1) 鉄砂青花葡萄文大壺
大和文華館蔵

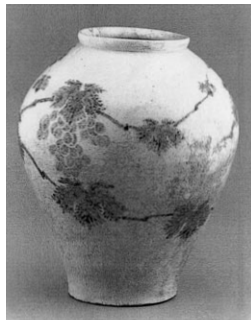


絵付けもまた奇をてらわず、しかし巧みに器体の丸味を活かす。葡萄の枝が左から右下方へ、壺正面の肩部のカーブをいつくしむかのようには山型に伸び、壺裏面では先が二本に枝分かれして壺胴部を上下から優しく抱える。うち下側の一本はさらに水平に延びて壺正面の主場面の、たわわな房と覆いかぶさる葉叢を下方からそっと支え画面全体を締めくくる。枝が連綿と続く蔓性植物としての葡萄の属性を見事に活かした周到な画面構成といえよう。

因みに我々の壺よりやや大きめだが同器形、同主題の壺がソウル梨花女子大学校博物館に所蔵されているが(韓国国宝107号)(図3)、こちらは表裏にほぼ同形の図柄が繰り返され、図像と器体の一体感という点でやや趣を異にする。

葡萄そのものの描写も優れて美しい。着彩は鉄絵具を用い、葉脈のみ青料(酸化コバルト、回青、それを用いた彩法を青花という)で引く。筆さばきは一幅の水墨画を思わせるように自在に、枝の節々にあたりを付け、葉先は鉄釉を滯らせて葉形

(図2) 同 裏面



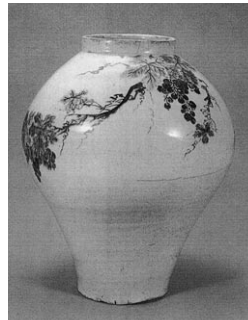
を的確に象る。果実は葉より一段と淡彩ながら一粒一粒丹念に輪郭を塗り残し、房全体にヴォリュームを与える。先に挙げたソウル梨花女子大学の類品が実を葉より濃く描いているのは、あるいは黒葡萄を表したものであろうか。因みに器形はやや異なるものの英国アシュモレアン美術館所在の同主題図(図4)では、葡萄の実を青花に着色してあり、こちらは青葡萄なのかも知れない。

注目すべきはその同じ青料で、我々の大壺は葡萄の葉脈を着色している点である。葡萄の葉を日にかざすと、葉面の濃い緑の中に葉脈が薄グリーンに透いて見える。その透明感をこそ表すべく、葉脈の描写に青料が用いられたのであろう。誠実な観察にもとづく見事な写実ということが出来よう。

ところで葡萄の図は実の多さと蔓が連綿と続く属性から子孫繁栄のシンボルと見立てられ、中国唐時代の工芸品に盛んに取り上げられ、南宋、元に至ると陶磁器や染色の文様だけではなく水墨画の画題として、文人や画僧が好んで描くところとなった。

その傾向は朝鮮半島にも受け継がれ、17世紀前半の画家李繼祉は墨葡萄図で名を成し、同世紀後半に活躍した洪受疇は、葡萄の枝を大きく人型に二分する構図を編み出し一世を風靡した。一方、15世紀末の朝鮮の地理書『新增東国輿地勝覽』によれば、青花の絵

(図3) 鉄砂葡萄文壺 ソウル梨花女子大学校博物館蔵



付けをするために年に2回、王室所屬の専門絵師が都から京畿道広州の官窯に派遣されたという。我々の大壺の葡萄図もそうした一流画家の一人、少なくともその流れを汲んだ専門絵師の手になるものであろうか。いずれにしてもその青花も鮮やかな葡萄の姿に、そして柔和で暖かい器形と釉白色に、清新な写実と自然の息吹が強く感じられる。

さて李氏朝鮮王国は国初以来儒教を国教とし、それまでの王氏高麗の仏教文化を一変させ、奢侈を排し清廉潔白を旨とする文化の構築を目指す。但しその前半期は隣国中国明朝との交流が深く、陶磁生産においても明朝青磁の影響を色濃く残していた。

ところが17世紀初頭、中国王朝が明朝から清朝に代わり、その清軍の侵攻(1627年と1636年の丁卯丙子胡乱)に破れて以来、朝鮮の清に対する反感は強まり、何事にも冷徹なまでの均斉を旨とする清朝文化見直しの気運が高まる。朝鮮固有の写実様式と称揚される画家・鄭敳のいわゆる真景山水画が登場したのはそのおよそ100年後のことである。本館所蔵の「鉄砂青花葡萄文大壺」の造形に、その鄭敳の伝世作品「金剛全図」(韓国龍仁市、湖巖美術館蔵)の清新な写実と暖かくも清い青と白に通底するものを感じるの私だけであろうか。

(図4) 鉄砂青花葡萄文壺 アシュモレアン美術館蔵

